

平成30年度「アドバイザー派遣事業実施レポート」

研究団体：「教えて考えさせる授業」研究会

アドバイザー：市川伸一教授（所属：東京大学大学院 教育心理学教授）

実施日：第1回 平成30年6月23日

第2回 平成30年9月26日

実施場所：倉吉市立西中学校

1、研究テーマ設定の理由

【研究テーマ】

『確かな学力の定着と学習の主体者の育成～「教えて考えさせる授業」を通して～』

「教えて考えさせる授業」は、基礎知識は教え、思考表現を通して深い習得を促すことを目標とし、教えることと活動することのバランスが取られた授業スタイルである。これにより、生徒は単に知識だけでなく、学び方や発想（資質・能力）を身に着けることができる。

「教えて考えさせる授業」のねらうところは、新学習指導要領が提唱する「主体的・対話的で深い学び」と合致していると考え、全教科で研究を進めることとした。

研究の一年目に当たる本年度は、協議のテーマを『本時目標を達成するために「説明」「理解確認」「理解深化」「自己評価」の4段階は効果的であったか？』とし、「教えて考えさせる授業」のスタイルを本時目標に照らし合わせて定着させることに主眼を置いた。

2、実践内容

①第一回校内授業研究会（平成30年6月23日）

1年社会

「中国にならった国家づくり」

2年技術家庭科

「袋の展開と製作を通して構成を知り、自分の作品に生かせる工夫を見出そう」

②第二回校内授業研究会（平成30年9月26日）

2年数学

「1次方程式」

1年理科

「気体の性質」

第一回、第二回の授業研究会では、市川伸一教授の助言をいただき、「教える」「理解確認」「理解深化」「自己評価」それぞれのねらい、展開の仕方、時間配分について共通理解することができた。

また、研究協議においても「三面騒議法」の効果的な方法について、代替案を積極的に出すなどのアドバイスをいただき、協議の内容を深めることができた。

研究授業だけでなく、2限、3限のほぼ全教員の授業を市川伸一先生に参観、助言していただき、全校体制で主体的に授業研究会に臨むことができた。これにより、共通の課題（話し合いの人数、発表方法、振り返りの文章化など）を明確にできた。

第二回の授業研究会では、特に「困難度査定」（生徒のつまづきを予測し、手立てを講じておく。）を意識し、指導案の段階で明示しておくこと、「意味理解」を大切にすること、「自己評価（振り返り）」の文章表記の仕方を工夫することといったアドバイスを受けた。

これらの課題を受け、第三回校内授業研究会では、国語、英語の授業を平成31年1月23日に行う予定である。

3、研究の成果

- ・「教えて考えさせる授業」では「予習」を重視しており、予習をさせる教科が増えたので、生徒に予習をする習慣が定着した。これにより、授業の理解度が深まったと思われる。
- ・「教える」（教師の説明）の直後に、その内容の「理解確認」の時間を持つことで、生徒が身に着けるべき基本事項の定着度が高まったと思われる。
- ・「振り返り」（自己評価）を行うことで、生徒のメタ認知ができ、主体的に授業に向かう姿勢が作られてきた。
- ・全教員が指導案を作って公開授業を行い、市川教授に参観し助言していただくことで、全員で問題意識を共有し、主体的に参加する授業研究会とすることができた。
- ・「教えて考えさせる授業」のスタイルを全教科で行うことで、教科に関わらず共通した問題意識で話し合いを持つことができた。
- ・事前研究会、三面騒議法による検討会を行うことで活発な話し合いがなされ、参加者の授業を見る視点や指導のレポーターが広がった。

4、今後の課題

- ・長文の文学作品や長いスパンの歴史学習、時間のかかる実験などの分野が「教えて考えさせる授業」のスタイルにはまりづらく、さらに研究を進める必要がある。
- ・「道徳」での実践事例が少なく、道徳で何を「教える」のか、「理解確認」するのかがあいまいである。
- ・研究授業の前後や授業参観週間では、さかんに授業を見合ったり論議されたりするが、日常的には授業を見合うことが少ないので、普段からお互いに授業を気軽に見合う体制づくりが必要である。
- ・今年度は「教えて考えさせる授業」研究の初年度であり、基本的なことを中心にメンバー全員の協力体制を組んで行うことができた。次年度からは年度ごとの目標を明確にして一歩ずつ前進させていくことが課題である。